

瓢箪山古墳、そして瓢箪の聖性と親近性について

―「瓢箪」からのメッセージを読み解く―

石上 敏

一、瓢箪山古墳について

「瓢箪山」（東大阪市東南部。旧枚岡市）という地域名の由来となった瓢箪山古墳は、生駒西麓から山腹にかけて分布する山畑古墳群の最西端（平野部）に位置する古墳群最大の古墳であり「山畑五二号」と呼ばれている。しかし、六世紀末の築造ということ以外、被葬者を含めて詳細は不明である。瓢箪山という呼び名の通り、二つの円墳が合体した双円墳の南側が鬼塚、北側が大塚（狐塚）と呼ばれている。その中央西側に瓢箪山稲荷神社の本殿・拝殿があり、表参道が西へと通じていて、かつては伏見・笠間・豊川など日本三大稲荷に数えられる稲荷神社をも凌駕するほど、日本で最も盛行した稲荷神社であったと言われている（**図版1** 参照）。

古墳の形態では前方後円墳が著名であるが、実は多様な形態がある。ただし双円墳は数が少ない。日本全国で報告されている古墳の数が約一六万基に及ぶ中で、双円墳と認定されているのは大阪府南河内郡河南町の金山古墳のみであり、瓢箪山古墳は未だ双円墳とは認められていない。金山古墳は、かつて一部に家が建つなど未整備の状態から、現在は整備されて古墳公園となっている。全長約八六mのこの古墳を観察すればするほど、全長約五〇mの瓢箪山古墳との共通性が見えて

くるが、瓢箪山の古墳としての検証は、今後しかるべき考古学者に任せるべきであろう。

ところで、ここまで「瓢箪山古墳」と述べてきたが、瓢箪山古墳は日本全国、とりわけ近畿一円から中部日本にかけて複数存在する。ひとつは滋賀県近江八幡市安土町にある瓢箪山古墳である。この古墳は背後に織（きぬがさ）山を控えた立地・景観が、生駒山を控えた東大阪の瓢箪山古墳とよく似ている。織山の標高は四三二mで、六四二mの生駒山の三分の二程度であるものの、周囲には古墳・寺院・城跡などの歴史遺産が多く存在し、とりわけ西国観音霊場・観音正寺の立地から観音寺山とも呼ばれる織山は、各時代を代表する宗教施設が集まった聖地生駒山を思わせるところがある。

奈良県には二つの瓢箪山古墳がある。奈良市佐紀町の瓢箪山古墳と、磯城（しき）郡三宅町の瓢箪山古墳である。奈良県内の古墳は九六〇〇基余りで、実はさほど多くない。都道府県別で最も古墳が多いのは兵庫県で一・九万基近くを数え、全国古墳の約一二％を占めている。以下、鳥取県・京都府・千葉県・岡山県・広島県・福岡県と続き、奈良県は第八位である。それらの中でも面積の広い兵庫県が非常に多く、奈良県はその約半数にとどまる。大阪府は一三位であるが、数は三四〇〇基余りで奈良県よりずっと少ない。和歌山県は二一位で一七〇〇基弱、滋賀県は二八位で九〇〇基強と、近畿の全体に古墳が多いわけではない。

第二位の鳥取県（因幡・伯耆国）や第四位の千葉県（総国・ふさのくに）、第五・六位の岡山県・広島県（吉備国）など、古墳時代（三世紀〜七世紀頃）に強い権力を擁した地域を中心に、古墳の分布はあまねく全国にわたっている（ただし、北海道・青森県・沖縄県では未発見）。瓢箪山古墳は愛知県名古屋守山区にも一基が存在するうえに、二〇一八年になって静岡県田方（たがた）郡函南（かんなみ）町でさらに一基が発見された。これは金山古墳とほぼ同じ推定八七mの全長を有する。「推定」というのは一部が破壊されて全長が確認できないからであるが、これほど大きな古墳がドローンなどの技術導入によって現在も次々に見つかるのであり、古墳の総数は増え続けている。

以上のように、私を知るだけで日本全国には六つの瓢箪山古墳が存在する。それぞれを三宅瓢箪山古墳（奈良）・佐紀瓢箪山古墳（同）・安土瓢箪山古墳（滋賀）・守山瓢箪山古墳（愛知）・函南瓢箪山古墳（静岡）と呼ぶならば、東大阪市の瓢箪山古墳は「河内瓢箪山古墳」か「山畑瓢箪山古墳」の名称が妥当であろう。ここは「瓢箪山」の名称通り、正真正銘の瓢箪型古墳（双円墳）であり、他の五つの瓢箪山古墳を率いて、「瓢箪山古墳サミット」を提唱するのにふさわしい。

近年『池の水ぜんぶ抜く』（テレビ東京）という番組に取り上げられた瓢箪山古墳であるが、今後も引き続きメディアに登場するだけのコンテンツに満ちた場所であることは間違いない。確かに現在は、世界遺産登録を契機として巨大な前方後円墳が注目を浴びている。面積では世界最大の墳墓とされる堺市の大山古墳や最初の前方後円墳と言われる三輪山西麓の箸墓古墳（第一一位）など、大きい古墳（第一一位〜第四四位）はすべて前方後円墳が占めており、全国古墳の特徴を融合したのがこの形態であるとされている。しかし、円と円

れる。秀吉と瓢箪との縁は、その一六年前に当たる永禄一〇年（一五六七）、また木下藤吉郎と呼ばれていた頃から続いていた。この年、信長の美濃攻めで稲葉山城（現・岐阜市）に潜入し手柄を立てた藤吉郎は、敵兵を倒した槍先に腰から下げていた瓢箪を結び付け、槍を振り回しながら勝鬨（かちどき）をあげたという。この時すでに秀吉にとつての瓢箪とは、腰に下げて戦場に赴くような縁起物・お守りとされていたのである。この功績によって馬印（うまじるし）の使用を許された藤吉郎は瓢箪の図を用いるようになり、信長の助言で戦勝に应じて瓢箪の数を増やしていったというのが「千成瓢箪」の由来である。秀吉にとつて縁起物であり自らのアイデンティティーともいえる瓢箪の形をした古墳のある場所に、大坂城鎮護の稲荷神社を建てたのである。創建から一五年後の慶長三年（一五九八）に秀吉は亡くなり、同二〇年（一六一五）に大坂夏の陣によって豊臣家は滅びるが、近世の大坂、そして近代以降の大坂では、豊臣方への親炙と鼻痕が消えることはなかった。

「瓢箪から駒」ということわざは、大坂の陣とも結びついて語られた。冬の陣の後、豊臣方の大名が香合せ（こうあわせ）を催した時のことである。各大名はそれぞれ豪華な景品を用意したが、伊達政宗の景品は腰に下げた瓢箪ひとつだった。ひとりの武士がその景品を選んだところ、政宗は「これこそ瓢箪から駒」と言い、自分が騎乗する名馬を与えたという。

近世に流行した「いろはかるた」の「ひ」は、上方（京都・大坂）では「瓢箪から駒」である（大坂は食い倒れの町らしく「貧僧の重ね食い」とも）。しかし江戸では「貧乏暇なし」である。江戸人は「瓢箪から駒」をただ「偶然」のたとえと理解するだけであったが、大坂では、瓢箪はより身近なものとして豊臣方の武将とともに愛されたのである。

近世後期に至っても『河内名所図会』（一八〇一年刊）

に描かれたのは、大坂の陣で戦死した徳川方の武将・山口重信の大きく立派な墓所には参拝者が殆どおらず、道一本挟んだところにある簡素で小さな木村重成の墓に参拝者が引きも切らない様子である。木村重成は今でこそ知る人も少なくなつた豊臣方の武将であるが、戦前までは真田幸村を凌ぐほど人気のあつた若きヒーローである。江戸時代を通じて書籍に豊臣方を載せることは処罰の対象であつたにもかかわらず、実際には右の例のように描かれることも少なくなつた。芝居では「三浦之助」といえば誰もが重成のことと知っており、近代に至るまでその人気が衰えることはなかった。

徳川政権は大坂の陣の後、豊臣の支配を無化するよううに大坂城天守閣を破却し、すぐ横に大坂の町を睥睨する約一・五倍の天守閣を建てて見せた。しかし、約半世紀後の二度にわたる落雷で焼失してからは、江戸時代の大半を通じて天守閣は不在のままであり、再建は幕末の弘化三年（一八四五）に至ってからである。わずかに五年で二度の落雷を秀吉の怨念の仕業と考える者も少なくなつたはずだが、そのような噂を徳川は全力で抑えた。しかし大坂夏の陣の主戦場であつた河内では豊臣方の武将を「残念様」と称し、豊臣治世を称揚するような信仰が巻き起こることまでを防ぐことはできなかった。木村重成は「残念様」の代表格として持ち上げられ、昭和に至ってテレビの時代が到来するまでヒーローの座に君臨し続けたのである（拙稿「木村重成論」、『大阪春秋』一五八号、二〇一五年）。秀吉が「豊国神」として祀られ、豊穰と収穫の象徴と化した影響も大きかつたが、大坂（摂津）や河内では、陰に陽に豊臣への信仰・親炙が続いたのである。そのことが瓢箪山稲荷の繁栄につながり、瓢箪という縁起物への親近感を持続的にもたらしたものと考えられる。

四、俳句に詠まれた瓢箪——「つゆい」と「ふくべ」

俳句は近代（明治以降）の呼称であり、近世（江戸時代）までは俳諧（はいかい）と呼ぶのが正しいが、本稿では無用の混乱を避けるため「俳句」に統一した。

伊賀上野に生まれ、江戸で活躍した松尾芭蕉には、「ものひとつ瓢（ひさご）はかるきわが世哉」という句がある。「私が持っている物は瓢箪ひとつ程度であり、おかげでいかに世の中を軽く生きていられることか」という、まさに芭蕉の生き方を瓢箪に託した俳句である（ただし、江戸時代の呼び方では「発句（ほつく）」が正しい）。小林一茶には「ひょうひょうと瓢の風も九月かな」と、吊るした瓢箪を揺らす晩秋の風を詠んだ句があり、長年の病臥を余儀なくされた正岡子規には「ぶらぶらと小窓うれしき瓢哉」がある。このように、瓢（ひさご）は「軽い」ものの象徴として詠まれ、それは吊るして眺めるものであつた。「ひさご」は「ひしゃく（柄杓）」と訛（なま）って、水などを汲む道具の名前にもなつてゆく。

その一方で、芭蕉門人の山口素堂に「嘆けとてふくべぞ残る垣の霜（悲しみなさいと言うように、霜のおりた垣根に瓢箪が残っている）、子規には「魂はふくべなりけり瘦案山子（やせかかし）」（瘦せた案山子に吊るしてある瓢箪はその魂なのだろう）という俳句があつて、瓢箪が「魂を込める」役割を果たしていたことを知る。夏目漱石門人であり、「天災は忘れた頃にやってくる」という警句を残した寺田寅彦には、「赤蜻蛉（とんぼ）のせて流るる瓢かな（瓢箪が赤とんぼを乗せて流れてゆく。まるで精霊流しのように）」という句があり、これも「ふくべ」と読んだ可能性がある。魂を入れて運ぶ器（うつわ）として瓢箪が詠まれる場合には、「ふくべ」

と読むことが多かった。「ふくべ」には「福」が懸けられ、詩歌の中でも縁起物として詠まれている。桜井梅室に「なでるほど命の長きふくべかな」、岩田涼菟に「元日やふくべの艶(つや)をなぶりけり」という句があつて、瓢箪をなでて長寿を祈る人も多くいたのであろう。芭蕉門人の宝井其角には「瓢箪のさても達磨に似たる哉」という見立ての句があり、瓢箪の形自体も縁起物として珍重されることが多かった。加舎白雄は「浅からぬ瓢をいのちの秋の雨」と詠み、瓢箪に生命の象徴としての姿を見いだしており、江左尚白の「百なりて中にひとつのひさご哉」は、たぐさんの瓢箪の中から自らの生命を託すほど気に入ったひとつを選び出した時の幸福感を詠んでいて、それほどまでに自分だけの瓢箪を大切にしたい人たちがいたことがわかる。江戸時代を称して「庶民の時代」と呼んだり、「徳川の平和」と名づけたりする、その本質は、このようなところこそあった。

私の調査が至らぬせいもあるだろうが、俳句(俳諧)には数多くの瓢箪の句が認められる一方で、瓢箪を詠んだ和歌(短歌)を見いだすことができない。それだけ瓢箪は身近な世界のものであり、雅(みやび)な和歌の世界とは無縁であると、少なくとも江戸時代以降には考えられていたのだろう。

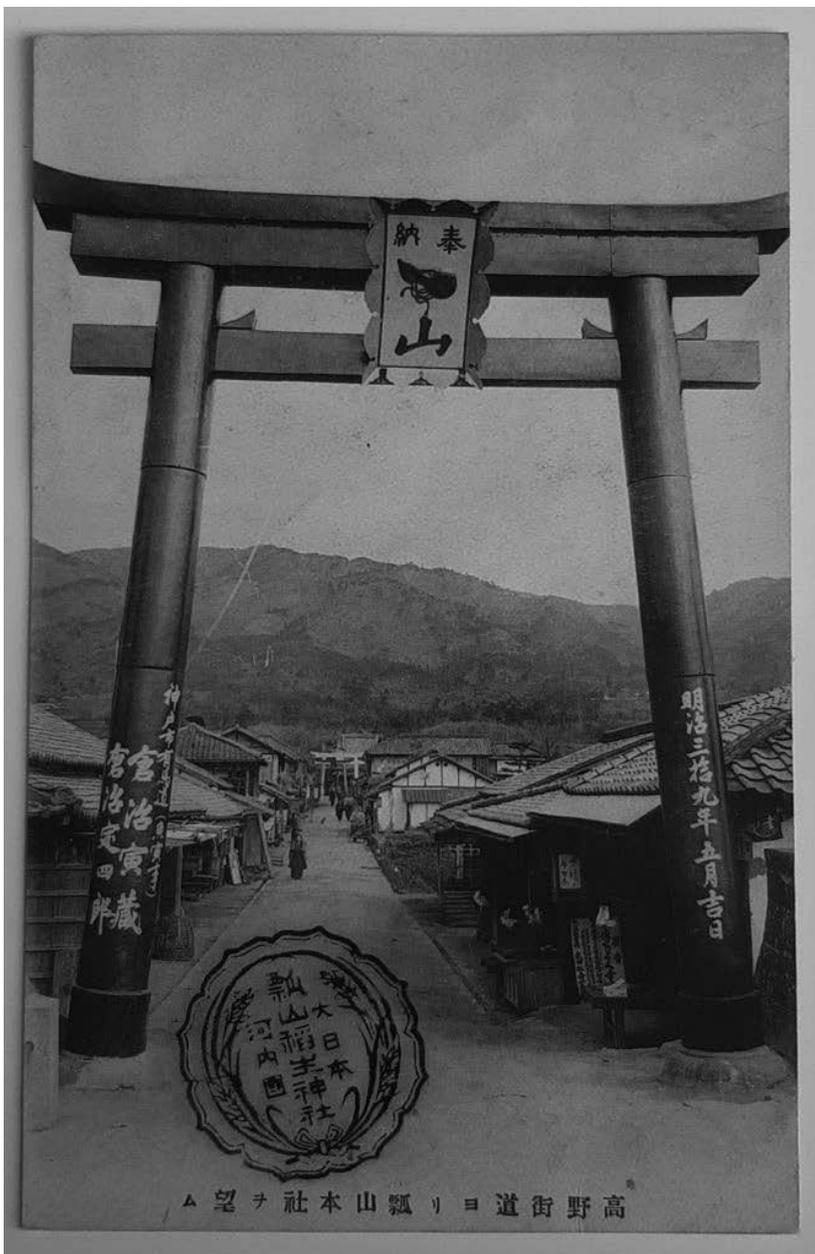
五、おわりに — 今後の展開に向けて

以上、古代の古墳にはじまり、瓢箪についてあれこれ見てきた。江戸時代以来の卑俗化・滑稽化の流れを汲んでいる現在の瓢箪を、かつてのように聖なるものとして見直してゆく契機は、やはり瓢箪山古墳にあり、瓢箪山稲荷神社にあるだろう。そして卑俗化からの脱却を図るために、瓢箪山という地域の人々、とりわけ歴史と現代をつなぐ場としての商店街の役割は欠かせない。

瓢箪の魅力がどこにあるかといえは、まずはその形である。瓢箪の有効なロゴ化・デザイン化はすでに商店街活性化プロジェクトとして成功しており、瓢箪山という名称の魅力も「ジンジャモール瓢箪山」「ひよっこりひよたん山」などのキャッチコピーによって浸透が進んでいる。これらに付加すべきものがあるとすれば、「円」(縁)と「円」(縁)を結ぶ「恋の辻占」を、現代的アレンジによって復活させてゆくプロジェクト、瓢箪の有する聖性の発信と、吉兆としての「ふくべ」の積極的な利用などが考えられる(図版2) 参照)。

ただでさえ平地に古墳の少ない中河内に、誰が何の目的で、それも双円墳という形態を選んで古墳を造営

したのか。解くべき謎は多いが、秀吉の登場を待つまでもなく、この地が特別な場所(トポス)の持つパワーに満ちていたことは間違いない。土地のパワーを見いだすのは人間であり、その感応力が歴史と文化を支えてきた。「瓢箪」の持つ聖なる力、縁起物としての親近性、そして「福」を含んだありがたさ。それらが混然一体となつて、聖なる山である生駒山(その形は見方によっては瓢箪である)を背景に展開してきた瓢箪山の歴史は、見過ごせない(私はこれを「瓢箪から生駒山」と呼んでいる)。瓢箪山地域による将来を見据えた取り組みは、他の地域への大きな刺激となりつつ、文化による地域振興のモデルとして注目されるだろう。



【謝辞】本稿は、第六回ひょうたん山夢街道歴史トーク（二〇二二年八月二九日）の「わが町瓢箪山！商店街の歴史探訪」と称する拙講演にもとづくものです。特に、杉山三記雄・金子正人両氏のお手を煩わせたことを記し、御礼申し上げます。また、当日助手を務めてくれた大阪商業大学卒業生・松浦康之氏に謝意を表します。

二〇一八年の第四回に引き続き、この困難な社会状況下に歴史トークという貴重な報告の機会と、『あしたのつ』誌への掲載の機会をいただいたことに感謝しつつ、今後もこの魅力的な地域の歴史と文化の解明に向けて

微力を尽くして行くことをお約束させていただきます。

なお、本稿の図版は、いずれも梅田豪氏の所蔵資料を使用させていただきました。梅田氏及び足代健二郎氏のご好意に対して御礼を申し上げます。

【図版1】瓢箪山稲荷神社の絵葉書。「瓢山」の扁額を掲げた一の鳥居には、明治三九年（一九〇六）五月の寄進日が記されている。表参道の両側には茶店や旅籠が建ち並んでおり、往時の隆盛をうかがわせる。（梅田コレクションより）

【図版2】瓢箪山稲荷神社の絵葉書の袋（畳紙・タトウ）。「辻うら」の箱の中に見える「十一番」の神籤（みくじ）は実際に引き出すことができる。大軌（大阪電気軌道）ひょうたん山駅のスタンプは、昭和八年二月二八日の日付である。（梅田コレクションより）

（大阪商業大学教授）

